

ハンザキとは？

ハンザキは、日本に固有の種である大山椒魚（オオサンショウウオ）に対する、地方名である。この完全水棲両生類は、中国と北アメリカに生息する２つの仲間の種と同じく、何百万年という進化の過程を経てもなお、大部分が変化していない、生きた化石である。

標準和名では、この両生類は、オオサンショウウオと呼ばれる。オオは、「大きい」、サンショウウオは、このような生物種の総称である（英語では「salamander」）。一方、ハンザキという名前は「半分に引き裂かれた」という意味である。切断された手足を再生させるオオサンショウウオの能力を指し、こう呼ばれている。また、この再生能力は、ハンザキが半分に切られても生き延びることができたとの民間伝承の基にもなっている。

中国の類似種と同様、オオサンショウウオは、現存するサンショウウオの種として世界最大のものである。大山椒魚は、１５～２０歳で成熟し、長さ１５０センチメートル、重さ３５キログラムまで成長することがある。寿命は、７０年以上になることもある。

ハンザキは、頭の前方にかけて、小さな目を持っている。どれだけ上手く物を見られるのかは不明だが、ハンザキは、動きを追跡することができ、口の近くで動いている物すべてに飛びついてしまう傾向にある。その結果、ハンザキは、見境なく物を食べることになる。大きく開く顎と、小さな鋭い歯を使い、カニ、魚、他の両生類、虫、そして、小さな哺乳動物まで捕まえてしまう。ハンザキは、ほとんどのサンショウウオがそうであるように、えらが付いた状態で誕生するが、３歳頃になるとえらは消失し始める。その後は、皮膚を通して酸素を吸収する。皮膚の表面積を広げ、酸素の吸収を促進するため、体の側面に沿って、緩く折り畳まれた部分が存在する。このため、ハンザキは、呼吸するのに十分な酸素を行き渡らせてくれる、清潔で、動きの速い水が必要とする。

オオサンショウウオは、底が砂利の川や小川に、縁沿いの穴や隠れ場に身を潜めて生息している。これらはまた、交尾のための巣穴の役割も果たす。それぞれの巣穴を、雌を引き込み自分の縄張りで産卵してもらうことを望む、一匹の雄が守っている。産卵（通常８月下旬から９月中旬）が終わると、この「巣の主」は、卵を受精させるため、精子を放出し、その後の続く６か月間は、卵や、卵からふ化した幼生を守りながら過ごす。

悲しいことに、ダム建設やコンクリートによる護岸などの人間活動が、ハンザキの生息環境の多くを破壊したり、深刻な打撃を与えたりしている。環境省が管理する絶滅リスクの指標であるレッドリストの２０２０年版では、オオサンショウウオは、準絶滅危惧（ＮＴ）から絶滅危惧ⅠⅠ類（ＶＵ）にカテゴリーが引き上げられている。

地方文化におけるハンザキ

この地方のある民話では、長さ10メートルのハンザキが、家畜や、すぐ近くを歩く人を食い尽くし、村を困らせる様子が語られる。村人は、誰かがこの怪物を退治すれば、退治した者に報奨金を与えることにした。彦四郎という男がこれに志願した。彼は、歯に短刀を噛みしめ、水に飛び込んだ。ハンザキはすぐに、彦四郎をごくんと飲み込んだが、彼は、ハンザキを内側から割き破った。この獣は、退治されたように見えた。しかし、その日以降、彦四郎の家は、奇妙な騒音に悩まされた。そして、彼と、彼の家族全員は、奇妙な死を遂げた。村人は、復讐心を募らせたハンザキを鎮めるため、神社を建立し、ハンザキに、神格化した名前、鯢大明神を与えた。

毎年8月8日には、湯原の町で、このユニークな神に敬意を表し、はんざき祭りが開催される。ハンザキの像（赤みがかった色合いの雌と、より黒い皮膚をした雄）を乗せた2つの巨大な山車が、踊りと生の音楽に合わせ、通りを行進する。暗くなると、陽気な騒ぎの中にハンザキの形をした提灯山車が投入され、お祭りは花火で締めくくりとなる。

ハンザキを見る

隠れて生息する野生のハンザキを見つけるのは難しいかもしれないが、真庭を訪れる観光客は、この保護種を、1971年に設立された研究・保存施設、はんざきセンターで見ることができる。はんざきセンターでは、卵内の胚から完全に成長した個体となるまで、すべての発育段階における数多くハンザキが、生きた状態で保管されている。この施設ではまた、長さ150センチメートル、重さ30キログラム以上を誇る、保護下の成体としては記録的なものも収容している。このセンターの展示から、観光客は、この希少動物の自然の生息環境や、地域の言い伝えにおいてハンザキが描かれてきた様子、現在実施しているハンザキ保全の取り組みなどを学ぶことができる。